浄瑠璃姫と岡崎 ～桜と姫に守られて～

岡崎呉服協同組合
理事長　**加藤　善啓**

皆さん、おはようございます。21年度のオープニングに、このようにご指名を賜りまして大変光栄に思っております。また、多くの皆さま方をお招きしての会、大変嬉しく思っております。先程、開講式でお話いただいた大学の先生方に「加藤さんは歴史が専門ですか」と。「いえ、私はただの呉服屋でございまして、一介の呉服屋のお話をさせていただきます。」また、「岡崎に生まれて岡崎に育ったものでございますので、『岡崎贔屓のお話』をさせていただきたいと思っております。この辺も学会でのお話と幾分違うところがあるかと思いますが、加藤のお話ということでご容赦をお願いしたいと思っております。」それでは早速お話に入っていきたいと思います。

私が日頃思っていることでございますが、「岡崎の歴史を遡ると家康公生誕の時点で止まってしまう。」これはずっと昔から思っておりました。この家康公生誕の時点、この壁を突き破ると一気に古墳時代までいってしまうんです。その間の中世あるいは古代の時代を飛び越えて古墳、丸山古墳であるとか、岩津古墳であるとか、矢作川古墳であるとか、その辺の時代へいってしまう。過去4年間、この岡崎学、32人の方が岡崎についてお話をされていますが、この古代・中世、お一人もお喋りになっておりません。古墳時代につきましては荒井信貴さんが昨年お話になってらっしゃいます。それから花井しおりさんが額田王について、天智天皇、天武天皇の時代でございますが、お話になってみえますが、結論でいうと、岡崎の額田と額田王の関係は認められなかった。つまり岡崎の歴史についてお話になっていない。33人目が私でございますが、初めてこの時代、古代・中世についてお話をさせていただくことになります。なぜかということについても私なりの結論をお話させていただきたいと思っております。

それでは岡崎にとって浄瑠璃姫物語、この浄瑠璃姫というのは伝承の人物。文芸に出てくる人物でございまして、実在の人物ではございません。実在の人物ではございませんが、あたかも実在の如き岡崎の歴史とからみ合ってまいります。ひとつはなぜ矢作が舞台なのか、これが私にとって大きなテーマでございました。もうひとつは浄瑠璃姫、明治になると消えてしまいます。岡崎の人から、岡崎の人の心から浄瑠璃姫が消えてしまいます。なぜなのか。このふたつのテーマについても追っていきたいと思っております。

まずはじめに「岡崎にとって浄瑠璃姫物語とは」。竹本住大夫師匠、人間国宝でございますが、1週間後の10月17日に岡崎にまいられます。せきれいホールで源氏十二段を語っていただきますが、「なほになほなほ」という、この本でございますが、昨年12月に師匠が発刊された本でございます。この中で、岡崎にとって浄瑠璃姫物語とは、「浄瑠璃節のご先祖様のお話である。」と、一言で述べられております。これはどういう意味かといいますと、浄瑠璃姫物語、ご承知のように義経と浄瑠璃姫の一夜の恋の物語。悲恋でございます。これが語り物となりまして、語り物といえば平家物語が有名でございますが、平家物語の次に登場したのがこの浄瑠璃姫物語。これが都では「十二段草子」という名で語り物として、琵琶法師が琵琶を奏でながら語っていく。この浄瑠璃姫物語十二段草子を語る、その節回しが独特でございまして、これがいつしか浄瑠璃節と呼ばれるようになった。江戸時代になりまして人形が加わり、人形浄瑠璃となるわけなんです。つまり人形浄瑠璃の浄瑠璃とは浄瑠璃姫の浄瑠璃でございます。浄瑠璃節でもって語られたこの独特の語り、これが人形浄瑠璃。それでは世界は人形浄瑠璃をどのように見ているかと申しますと、ユネスコが世界無形文化遺産として認定した平成13年に能楽、お能ですね。それから平成15年に人形浄瑠璃。平成17年に歌舞伎。この3つが世界が認めた日本の芸能でございます。2番目に認められたのが人形浄瑠璃。このことは岡崎矢作を舞台に作られた浄瑠璃姫物語。これが京の都で独特の節回しで語られました。その浄瑠璃節が元となって人形浄瑠璃が生まれました。岡崎からの発信が日本中を駆けめぐり、世界が認める日本の芸能、世界遺産となりました。これはまさしく先程の開会の言葉にございました、岡崎を

勇気づけるお話ではないでしょうか。昨年の岡崎学の荒井さんがおっしゃった「地域学は地域を勇気づける学問だと」これは森浩一名誉教授がいわれた言葉でございます。今日皆さんにこの岡崎十二段という、岡崎を勇気づける十二のお話。その第一段がこの浄瑠璃姫物語。これは岡崎が誇る、岡崎を勇気づけるお話ではないかなと思っております。今からこの十二のお話についてお話をさせていただきますので、少し急ぎで進めていきたいと思っております。

それでは岡崎市は、行政はこの浄瑠璃姫についてどのような見解を持っているかと申し上げますと、平成14年に家康館におきまして「岡崎の説話　浄瑠璃姫特別展」という催しが行われました。その時に発刊されたのがこの冊子でございます。この冊子の中に岡崎市の公式見解が述べられております。お配りしました資料の1ページ目についておりますが、また後程お読みください。その抜き出しが今スクリーンの方に出ております。昭和11年頃から第一次伝説再考が行われた。そして第二次伝説再考の時と致しまして、石田茂作氏著『浄瑠璃姫之古蹟と傳説』。これが浄瑠璃姫伝説の集大成的なものとなっている。この本でございますが、そんなに厚い本でもございません。これが石田茂作博士が書かれた伝説の集大成的なものであるといわれたものです。このことについては後程またお話させていただきますが、この石田茂作という方は矢作東小学校の出身でございます。岡崎の名誉市民です。確か3番目に名誉市民になられた方でございます。考古学者でありまして、古代寺院研究では日本屈指の学者でもあります。北野廃寺の研究でも有名でございまして、また浄瑠璃姫研究でも有名な功績を残された方。私から申し上げますと、岡崎の浄瑠璃姫研究はここで止まってしまったのかなという気もしております。このことについて後程お話させていただきます。

それでは本論に入らさせていただきます。あさひ長者伝承、これは岩津に伝わる長者の伝説でございまして、非常に面白い伝承です。昔、あさひ長者と呼ばれる人がいました。大門に門が、蔵前に蔵が、井ノ口に井戸がある。凄いでしょう。これ地図でいいますと、大門、井ノ口、蔵前。じゃあお屋敷はどこなのかと。屋敷は今の大門大橋を渡った北野の辺りから安城里町までがお屋敷であったといわれる長者なんです。そんな馬鹿なことがあるかとおっしゃるかもわかりませんが、これが伝承でございまして、この長者は長く生きて四百歳になっても死ねず。この四百歳ということ。これは何を意味しているかといいますと、その後に真福長者、まさち長者というんですが、真福寺を建てたといわれる物部真福と同じ方だと、同じ、重なってくるというのが次に書かれております。そして四百歳、四百年経ってこの長者は兼高長者に代わるんです。これは何をいっているかと申しますと、あさひ長者、お薬師様の化身、人間と思うと四百歳だから無理なんですが、お薬師様の化身と思ってくだされば四百年生きた、これでご納得いただけるんじゃないかと思うんです。歴史では何かといいますと、物部氏が矢作を四百年支配したというふうに考えればこの伝承をご理解いただけると思うんです。兼高長者の所領は西熱田に接し、もっとお屋敷よりも大きいですよ所領は。西熱田に接し、東国府の直轄領に接していた。これが兼高長者の土地でございます。それではこれを裏付ける資料でございますが、ふたつの資料がございまして、真福寺建立につきましては『聖徳太子伝古今目録抄』。この本は重要文化財でございます。「三河国額田郡在寺名真福寺此寺者物部大連守屋之子息真福之為父大臣所建立院寺也」これが書かれていることなんです。簡単にいいますと「物部守屋、聖徳太子と争った物部守屋でございますが、物部守屋の息子が真福。物部真福が建てたお寺が真福寺であるという資料でございます。そして2番目の物部氏がなぜ三河矢作にということにつきましては、『先代旧事本紀』。先代旧事本紀　第10巻　国造本紀でございますが、「以物部連祖出雲色大臣命五世孫知波夜命、

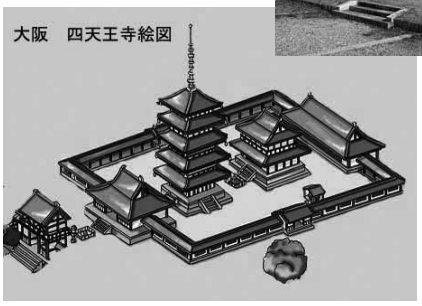
「岡崎十二段」 誇りある岡崎「十二のお話」

岡崎呉服協同組合
加藤善啓

1　浄瑠璃姫物語は浄瑠璃節の御先祖様
「岡崎から発信、浄瑠璃節がもとになって人形浄瑠璃ができあがった」
2　650年創建の北野大寺　三河物部氏の文化を誇る　塔の高さ33m
総瓦葺、朱塗りの門、伽藍は東西127m南北146mの大寺院
3　「みかどのさくら」は、「三河の平和が日本の平和」
702年持統太上天皇三河御幸
4　熱田大宮司が頼った三河藤原氏
「三河武士団誕生」
5　頼朝が三河武士団をひきいて京に上る　「鎌倉幕府開府」
頼朝の母 由良御前の実家は矢作　「頼朝が願った三河守」
6　三河足利100年に誕生した足利諸氏の数々
三河武士団の強化
7　尊氏が三河武士団をひきいて京に上る　「室町幕府開府」
三河足利六代100年　最後の当主は高氏　「生涯二度の矢作の決断」
8　浄瑠璃姫の庵室を本丸の守り本尊として岡崎城は建てられた
「姫に守られて岡崎城は建てられた」
9　兼高長者別邸の跡に建てられた岡崎城
「笹谷は岡崎にあった」　石田茂作「浄瑠璃姫の古蹟と傳説」
10　峯薬師の申し子として家康は生まれた
大御方 鳳来寺峯薬師　男子出生祈願通夜　「岡崎城」
11　家康の「江戸幕府開府」　「穢土を江戸に、東の浄瑠璃世界」
「東照大権現の本持仏はお薬師様」　日光東照宮奥の院
12　岡崎はもののふの文化のまち
「物部　頼朝　尊氏　家康」　岡崎より出でたる天下のもののふ

定賜国造」という文章でございます。これは継体天皇の御世でございまして、大和朝廷が朝廷として律令政治を始めようとした時に、国造を各地方に遣したということです。現実にはそれぞれの地方を支配している豪族が国造になったということですが、三河でいうと物部氏が国造に指名されたという文章です。ところがこの資料「先代旧事本紀」は偽の書であるとずっといわれておりまして、その偽書といわれる所以は、水戸光圀公、そして国学の大家の本居宣長が「これは偽の書である」といい放ったんです。これが昭和の時代まで続いておりまして、ところが、私は拍手喝采したんですが、昨年の岡崎学で荒井信貴さんが「実は最近これは歴史的に正しいということが学会でいわれ始めた」ということを昨年のこの会でお話をしております。と申しますのは、日本人というのは外国からいわれると「はい、そうです。」と納得するんですが、中国の隋の時代の書に書かれている国造、日本の国を支配している豪族、そのことと国造本紀に書いてあることとほとんど同じであるということが分かったんです。『先代旧事本紀』は物部氏のことを書いた本でございまして、神話の時代から書いてある。古事記と異なる神話が光圀公も本居宣長も認められなかった。でもこの岡崎、三河を物部氏が支配した。あるいは尾張は尾張氏が支配したということについては正しいんではないかと。これは大きなことでございます。

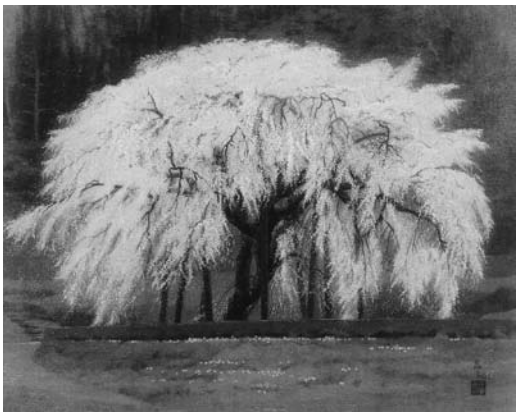
3番目に北野廃寺のお話がございますが、この絵図は大阪四天王寺の絵図でございます。そしてこの上の写真、これが北野廃寺の現在の写真なんです。姿なんです。これが中門、これが五重塔、これが金堂、そして講堂、これらが一直線に並ぶ、これが四天王寺形式といわれる伽藍配置、古代寺院の配置でございますが、この配置と同じ形を持っているのが北野廃寺。詳しくいいますと北野廃寺は四天王寺の金堂、これほどは金堂は大きくなかっただろうといわれておりますが、ほぼこの形でございます。この右側、ここに見られるのが五重塔、あるいは三重塔といわれる基壇の跡でございます。真ん中に丸いところが見えますが判りますかね。この丸いところが五重塔の心柱が建っていたところなんです。この心柱が直径84センチ、心柱を建てる礎石が直径2.5メートル。これから推定されることが33メートルの塔であっただろうといわれております。33メートルの塔というのは奈良の薬師寺の塔と同じです。法隆寺の塔はもう少し小さくて31.5メートル。この塔を持ったお寺が650年、いくら新しく見積もっても680年には岡崎には建っていただろうといわれております。33メートルの高さといいますとマンションでいえば11階建、12階建。それが650年。650年ということは奈良時代、平城京が始まったのが710年。平安京、京都の都が出来たのが794年。それよりも遥か以前です。私もついこの間知ったんですが、このお写真、岡崎城が取り壊される明治5年、6年に取り壊されるんですが、取り壊される直前に写された写真でございます。ご承知のように徳川家康公、岡崎城で生まれております、1542年。その時の岡崎城はどんな様子であったかといいますと、私も知ってびっくりしました。家康が生まれた岡崎城、瓦はございません。全て茅葺きです。石垣はひとつもありません。全て土塁でもって堀は造られ石垣はありません。これが家康公が生まれた当時の岡崎城でございます。それでは石垣が出来たのはいつかといいますと、田中吉政が岡崎に入ってきて石垣が築かれた。そして天守閣が出来たのは家康が亡くなってからでございます。それまでは何であったかというと砦です。天守閣に代わるものとして砦。これが家康公が生まれた時の岡崎城の姿なんです。もう一度申し上げます。650年に出来たこの北野廃寺、総瓦葺きです。900年時代遡るんですよ。朱塗りの門、総瓦葺き。900年経って造られた岡崎城は瓦はひとつもない。この建物が650年に岡崎にあったということは、これは三河物部氏の文化です。これはまさしく岡崎が誇れる文化ではないんでしょうか。このことが先程の水戸光圀公が偽書といわれた、三河物部氏を否定する文書であるということから未だに岡崎市は北野廃寺は物部氏が造ったといっておりません。北野廃寺の看板に載っているんですが「三河の矢作の一豪族が建てたお寺」と、一豪族ということで済ませております。もうそろそろ物部氏の、三河物部氏の存在を認めて、この素晴らしき伽藍を建てた岡崎の文化というものを私たちが誇っても良いのではないかと思っております。



北野廃寺

これは今年の5月に私ども岡崎呉服協同組合の総会の翌日の新聞でございますが、この写真に載って

おりますこの建物、奈良の薬師寺の大講堂でございます。この桜、この桜を植樹しようということで、この10月25日、奥山田の枝垂れ桜保存会の皆さま方とともにバス2台でもって奈良の薬師寺に駆けつけ、植樹をしてこようと思っております。この桜は100年後の想像の姿でございます。平成15年の1月9日に奥山田に咲く枝垂れ桜、その先の穂木っていうんですか、100本切り取りまして、摘みまして、奈良のその当時の薬師寺の管長でありました安田暎胤管長にお経をあげていただきながら穂を摘みました。その摘んだ穂を岡山の桜の研究所に持っていきまして、100本の接ぎ木をしたんです。100本接ぎ木致しまして、成功したのが4本。96本は全部枯れてしまいました。やっぱり相性があるんでしょうね。1300年前の桜でございます。帝お手植えの桜というと継体天皇の薄墨桜が有名でございますけれども、あちらは1500年。岡崎の枝垂れ桜は1300年。途中で代替わりしておりますので500年ぐらいだろうといわれておりますが、それでも500年の古木です、山桜。その4本成功した桜が、今鈴鹿でもって、鈴鹿の桜守が大きく育てていまして、この桜、今年の3月、5メートルの高さまでなりました。つい1週間前にいよいよ植樹する時期がまいりますのでご連絡致しましたら、もう1メートル伸びて6メートルになったと。これは元気な桜で大きくなりますよと。奥山田の桜は15メートルの木の高さあるんですが、そこまでいくでしょうと。千年先まで咲き続けるでしょうと。その桜を奈良の薬師寺にお手植えの桜の若木を持っていく。千年先まで岡崎の桜を奈良の薬師寺の大講堂の前、西の塔の前に植えるんですが、こんな楽しみなことをやっております。私が申し上げたいのはこの話ではございませんでして、奥山田の枝垂れ桜、持統桜といわれておりますが、持統天皇、正確に申し上げますと持統太上天皇が702年、三河の岡崎にきてみえるんです。10月10日なんです。今日。奇しくもご縁があって、702年ですから1307年前ですか、10月10日に岡崎にまいりまして1ヵ月間三河で滞在しているんです。11月17日に帰途につきまして、尾張に着いたというのが11月17日。11月23日でございましたか奈良に



薬師寺に奉納された木村恵子画伯「持統桜」

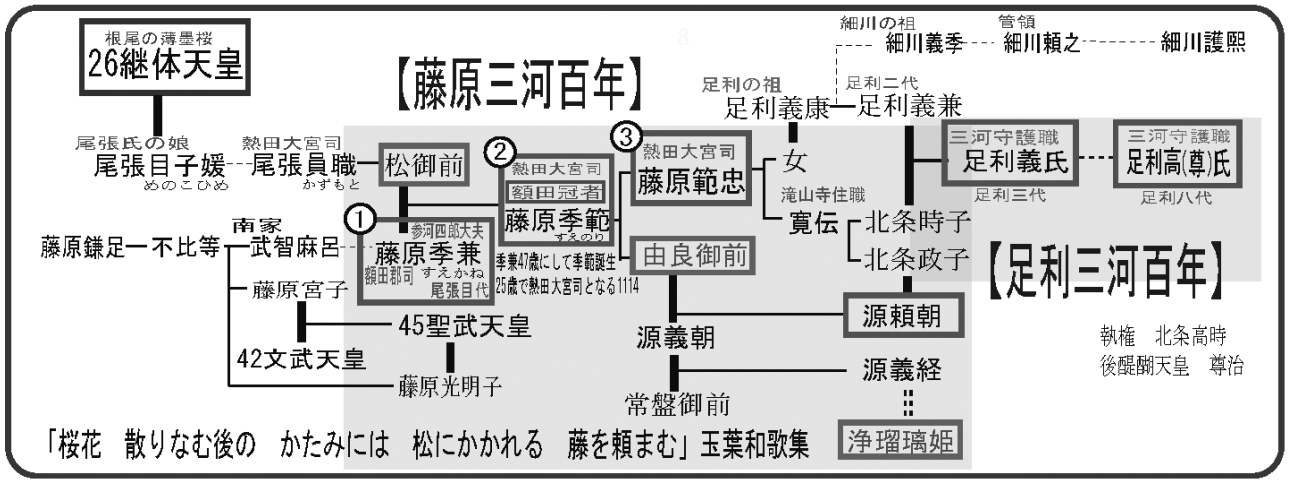
戻っているんですが、それから1ヵ月経って12月22日にお亡くなりになっている。58歳。つまり死をかけての旅がこの三河行幸であったんです。死をかけてまで1ヵ月間、三河で何をしたか。これは記録が残っていないんです。10月10日に三河に行幸という言葉があるんです。次にあるのは11月17日尾張に到着する。その間の文章が何もないんです。書けなかったんでしょうね。これを想像するのにまあ色々な説があるんですが、私が思うのは三河の物部氏に、これからも三河を宜しく頼むということをわざわざいいにきたと思うんです。この702年というのは日本にとっても大変な年、大切な年でありまして、日本という国、日本という言葉が出来たのが702年なんです。701年に文武天皇が、持統天皇の孫でございますけれども大宝律令を制定致します。翌年発布が702年でございます。それまでは国造、先程申し上げた国造の地方支配、ここからは国司というものが朝廷から遣わされます。この頃の日本にとって東の境がこの三河であったんです。だから三河の国の平和を守ることは日本の平和である。引き続き三河の物部氏よ、この地を平和であってください。その証として、木花咲耶姫の御神体をお持ちして村積山に祀ったであろうと私は思っております。その印が村積山の麓、真福寺の真北に植えられた帝お手植えの桜、持統桜ではないか。岡崎にとってもこの桜は1300年ずっと岡崎を見守り続けてきた大切な桜であると思っております。岡崎城の桜とは違う意味での歴史を背負った岡崎の平和を願う桜ではないかなと思っております。この桜も岡崎が誇る岡崎を勇気づけるお話ではないかなと思います。

それではいよいよ浄瑠璃姫の時代でございます。浄瑠璃姫には三河国司伏見源中納言兼高という方が登場してまいります。よく兼高長者と申しますが、兼高長者は兼高と矢作の長者、別の人間なんです。別の人間といったらいいのか、ご夫婦なんです。三河国司伏見源中納言兼高、これが旦那さんです。矢

作の長者、街道一の遊君といわれる、これが浄瑠璃姫のお母さんです。三河国司、この時代ずっと、この表はですね、四角く囲まれたのが三河国司、三河守といわれる、浄瑠璃姫の時代のことを記しております。藤原季綱でございますが、1076年に三河守に任命されております。この季綱は大変な家系でございまして、娘の悦子、これで「よしこ」と読むんですが、娘の悦子は鳥羽天皇の乳母、従三位の位です。この従三位という位は簡単に申し上げますと公家の中のベスト20、20番。公家の中の、関白から数えまして20番目ぐらいが従三位です。今の内閣が、総理大臣入れまして18人。だから大臣クラスと思ってください。この従四位というのが次に季範が出てくるんですが、従四位というのはこれも簡単

呉服組合が市に寄贈した姫と若の人形

にいうとベスト100です。国会議員で申し上げると当選4回とか5回クラスの議員さん。公家でいうとベスト100。これが従四位です。話を続けます。季綱の娘は従三位、鳥羽天皇に仕える。そして悦子のご主人は藤原北家の藤原顕隆、権中納言、白河院に仕えております。そして孫の藤原通憲。通称信西ですが、これは後白河天皇に仕えております。後白河天皇、白河上皇、鳥羽天皇。この3人に仕えているのが、季綱の娘、息子、孫でございます。この藤原信西は保元の乱の論功行賞を行って平清盛をこの時に抜擢というんですか、行賞を多く与えております。この信西は清盛とも息子を通じて姻戚関係を持っております。この三河守、実は清盛の弟も三河守になっているんです。これは1158年、平治の乱の前年でございます。そして清盛の息子、知度も三河守になっている。この知度が三河守になる頃といいますと、いよいよ平家が危なくなってくる時代になるんです。1179年9月に清盛の嫡男重盛が亡くなります。そしてその年11月清盛はクーデターを起こします。後白河法皇を幽室、関白を罷免し、知度を三河守とする。これはどういう意味かと申しますと、三河が関東源氏からの壁となって三河で防ごうと。その意味で三河が重要であった。だから知度を三河守にしたんです。そのことに対し源氏はどうしたか、頼朝はどうしたか。頼朝は1184年に弟の範頼を三河守にしているんです。まず三河守になることによって三河武士団を平家が持つか源氏が持つか、源平の戦いの前哨戦がこの三河であったんです。ついでに申し上げますと八幡太郎源義家、この源義家と矢作に土着した、この赤で書いてある季兼、季範、範忠、この関係がございまして、季綱は国司として矢作（岡崎）に任官しておりますが、恐らくほとんど京都で暮らしていたと思われます。その季綱に代わって兄弟の季兼が矢作に土着しています。矢作に土着した季兼は参河四郎大夫という号を持っております。開発領主として土地を開発し、三河の土地、三河の郡司として勢力を蓄えていきます。伸ばしていきます。そして季綱が三河守を終わる1080年に尾張まで勢力を伸ばしまして、尾張目代となっております。このことを考えますと先程の兼高長者、兼高は国司の中では見あたらない。見あたらないが季兼、季範、範忠、この赤いラインが兼高長者のモデルではないかなと私は思っております。この季兼、三河で勢力を持ち、尾張にも勢力を伸ばしてきた。そこで目をつけたのが熱田大宮司、尾張員職でございます。この熱田大宮司尾張氏というのは、国造として任命されたのが尾張の尾張氏です。熱田大宮司も兼ねております。ところが平安の終わり頃になりますと国司と旧国造の対立、国司に勢力を奪われていきまして、熱田大宮司でありながら尾張氏は段々衰えていくんです。衰えてきた尾張員職は三河で急成長をした三河藤原氏に頼みをお願いにあがった。つまり娘をもらっていただきたい。そこで季兼と松御前、この関係が出来たと思われます。藤原季兼、藤原季範、藤原範忠、三代三河100年の歴史を作ったこの三河藤原氏。松御前と結ばれることによってやっと生まれたのが藤原季範。この藤原季範は季兼47歳の子供でございます。47歳、昔の人の47歳ですからもう晩年です。やっと生まれた季範、やっと生まれた浄瑠璃姫、ちょっとここで似通ってくるんです。浄瑠璃姫の時代というのは、藤原範忠の時代なんです。1174年、承安4年、浄瑠璃姫と牛若が出会った年。その時の熱田大宮司は藤原範忠なんです。ここからは加藤仮説、私の仮説でございますが、兼高のモデルは誰なのかということに対して先程から申し上げております兼高の所領は西熱田領と接し、東は東国府の直轄領に堺する。この所領と熱田大宮司家三河藤原氏の所領と合致致します。と申しますのは、藤原季範が松御前の息子として生まれます。ところが47歳で生まれた子供でございますので、父親の季



兼は亡くなったとき季範は12歳です。12歳でございますので、松御前の実家、熱田大宮司家で養育されたといわれております。25歳の時に熱田大宮司になるんです。これは間違えやすいんですけれども、熱田大宮司、尾張員職の外孫、季範が大宮司になるんです。嫁に行った娘の子でございますので、ただ父親が早くに亡くなったから熱田大宮司に預けられたということでございます。それでは尾張員職に息子はいなかったかというと息子は5人も6人もいたそうです。にも関わらず外孫の子に熱田大宮司を継がせた。これは先程申し上げた衰えゆく尾張氏が三河藤原氏に頼ったと。勢いのある三河藤原氏に頼ったということでございます。25歳で季範は熱田大宮司になるんですが、熱田大宮司になりますと季範は住まいを京の都に移します。生活の拠点を京に移します。ご自身の40半ばぐらいまでは京の都であろうといわれております。娘の由良御前、由良御前も京都で生まれたか、あるいは京都で過ごしたといわれております。これが肝心なことなんですが、後程またこの話が続いてまいります。話を戻します。兼高をこの藤原季兼とすれば矢作の長者は松御前、街道一の遊君である。これは話が通ります。やっと生まれた季範、先程申しましたやっと生まれた浄瑠璃姫、男と女の違いはございますけれども、やっと生まれた浄瑠璃姫。由良御前を浄瑠璃姫と置き換えればお話が通ります。ただ由良御前は源義朝、源氏の御曹司です、御曹司と結ばれて添い遂げて源頼朝を生んでおります。これを添い遂げた義朝を悲劇の源義経と変えれば、つまり由良御前が浄瑠璃姫で、義朝が義経であると変えればこのお話が浄瑠璃姫、兼高長者のモデルではないかというのが私の推論でございます。この推論もっと進めて行きますと、ここから先は私自身もどうかなと思うこともあるんですが、兼高長者の「兼」は誰か。先程申し上げました藤原季兼の「兼」です。高は誰か、ずっといくと足利尊氏がここに出てくるんです。いや違うだろう、足利尊氏の「尊」は尊いの「尊」でしょう。足利尊氏は三河守護職、守護職と正式にはいうんですけれども、鎌倉時代になりまして、足利義氏が三河守護としてやってまいります。一説によれば足利義氏は足利から5千人の家の子郎党を連れてきたともいわれておりますが、そのことは定かではございません。いずれにしても足利義氏から三河足利100年が始まります。代々の足利の当主が三河で守護を努めます。最後の当主が足利高氏なんです。この時の足利高氏は北条高時の高を取って「高い氏」と名乗っておりました。足利尊氏が「尊い氏」になるのは後醍醐天皇に味方してからです。後醍醐天皇のお名前が尊治、後醍醐天皇と共にするようになって名前を変えた。ですから三河守護の時代である足利高氏は「高い氏」でございます。そうすると季兼からずっと足利高氏までが兼高であるとするならば、先程のお話、お薬師様の化身と考えるならば成り立つのではないでしょうか。もっと申し上げますと、これも後程出てまいりますけれども、浄瑠璃姫が都で語られるようになったのは1470年代です。義経と浄瑠璃姫が出会ったのが1074年です。都で語られるようになるまで兼高長者はお薬師様の化身として岡崎で生き続けたんじゃないでしょうか。都で語られた時、浄瑠璃姫は生き返ったんじゃないでしょうか。それが1470年代、ちょうど400年後なんです。1470年に400年を足すと1870年、明治維新。それまで浄瑠璃姫は生き続けたんじゃないでしょうか。ちょっと考えすぎかもしれませんが、浄瑠璃姫400年周期。

次まいります。少し整理させていただきます。平安時代400年続きますが、最後の100年。これは都と三河と次第に緊張関係を増していく。この時代でございます。1080年頃、都では院政と武士の台頭、この頃武士というものが階級として出てまいります。そして藤原氏は道長、頼通の全盛の時代「望月の欠けたることもなし」という、あの全盛の時代が翳りをはじめるのが1080年の頃です。この1080

年の頃に藤原氏は都から一斉に全国に散っていったと思われます。岡崎にも矢作にもこの時代に下ってきたのが藤原氏でございます。そしてその同じくして三河では季兼が矢作に土着した。季綱の系列を後ろ盾に尾張にも勢力拡大、尾張の目代ともなった。1114年に季範は25歳で熱田大宮司になります。これが尾張氏から藤原氏の大宮司交替。尾張氏はそれまでずっと大宮司です。この季範が大宮司になってから熱田大宮司はずっと明治になるまで藤原氏です。尾張氏は権宮司、大宮司の下でずっと働き続けます。ずっと明治になるまで藤原氏が熱田大宮司です。それから1140年、季範、滝山寺東谷に蓮華寺を建立、三河物部氏からの支配権交替。これが物部氏の400年の歴史が終わって三河藤原氏に移ったとされる象徴的な出来事が1140年でございます。1156年、59年都では保元・平治の乱、平家の栄華を迎えますが、この時を絶頂期に院とのあつれきが生じます。そして平家滅亡、源氏の世界が出てくる。この時ほど都と三河が緊張関係があったのは、おそらく岡崎の歴史で一番の時ではないかなと私は思っております。江戸時代になってからの三河と岡崎と江戸との緊張関係はほとんどございません。平和な時代であったということもございますが、岡崎の歴史の中で都との緊張関係、都、三河、三河の重要性、戦略的に重要である土地ということでいえば、これはとりもなおさず三河武士団をこの地が持っていたということでございます。この三河武士団を誰が支配するか、平家なのか源氏なのか。この時代であったんじゃなかろうかと思っております。

それでは次に足利氏の矢作支配100年ということをお話をさせていただきます。ここで三河武士団が変わってまいります。1221年承久の乱によりまして、足利義氏が三河守護職に任じられます。ここから先程申し上げたように足利の当主が六代ずっと三河守護に就くんです。足利第二の知行地といわれる三河。この100年の間に生まれてきたのが細川であり、今川であり、仁木であり、吉良であり、いわゆる後の戦国大名といわれる綺羅星の如く足利の支流がここから出ているんです。三河武士が足利の血を入れることによって最強の軍団を作っていったのがこの100年ではないでしょうか。この100年のことがあって足利尊氏が京に上ることが出来たといわれております。ところがです、ところがこの足利100年に今申し上げた三河武士団、強力なる三河武士団が出来るんですが、このことが近世においては全く知られていなかったと。これは愛知教育大の新行教授が岡崎市史で述べていることなんですが、徳川氏は新田氏の末裔としてその新田氏を圧倒して政権を掌握した足利氏の鎌倉時代以来の歴史を全く欠落させていた。江戸の学者さえも足利100年の歴史を知らなかった。知るすべもなかった。あるいは消されていたということであろうと思うんです。明治になってからは天皇中心の皇国史観になります。これも岡崎市史に書かれていることでございますが、足利尊氏と室町幕府については研究が全般的に遠慮される傾向が続いたと述べられております。

次にこれも最近私が知ったことなんですが、菅生川、乙川が矢作川に繋がったのは、私は明治以降だと思っておりました。明治用水の時代であると思っておりました。ところが調べてみると、菅生川、乙川ずっと流れてきますよね。菅生神社の辺りで真南に直角に折れて、この緑の線のようにずっと南に下っていた。それをここに六名堤といいまして堤を造りまして、現在のように矢作川に繋がるようにした。この工事が1398年には完成していたといわれているんです。なぜそんなことがわかるかといいますと、それまではここにずっと乙川が流れておりました。この辺の田んぼの水は全部この乙川から取っておりました。これがなくなっちゃいまして、上和田・下和田の住民から幕府に対して訴状が出たんです。田んぼの水がなくなった、何とかしてくださいと。これをもってこの川の流れが矢作川に繋がった。この矢作川に繋がることによってどうなったかといいますと、六名と明大寺を分け隔てておりました川がなくなったんです。なくなったということはここに大きな平野が出来たんです。久後崎という地名が今ございますけれども、これは後に出来た地名でございまして、この三島山、今の分子科学研究所がある所。あの山がございますよね。山がずっと明大寺になってここが平野になっています。岡の先に平野が出来た。で、岡崎という地名が出来た。私は岡崎というのは岡の先に出来たということも聞いておりましたが、岩津の山からずっと下ってきて岡の先、だから岡崎だと思っておりましたら、この三島山の岡の先、この辺が岡崎と呼ばれるようになった。それはいつ頃かと申し上げますと先程申し上げた、乙川西流化工事が完成しました、1429年から41年、はっきりしたことはわかっておりませんが、明大寺、六名の所に大きな平野が出来た。岡の先という土地が出来た。そこで明大寺にお城が出来たんです。岡崎城の前身でございます。この頃より明大寺に東矢作岡崎郷が出現するという記録が残っております。ですから岡崎といわれるのはこれからなんですよね。たかだか500年ぐらい前のことなんです。それまでは何であったかというと、東矢作、西矢作、矢作でございます。浄瑠璃姫の頃は矢作でございま

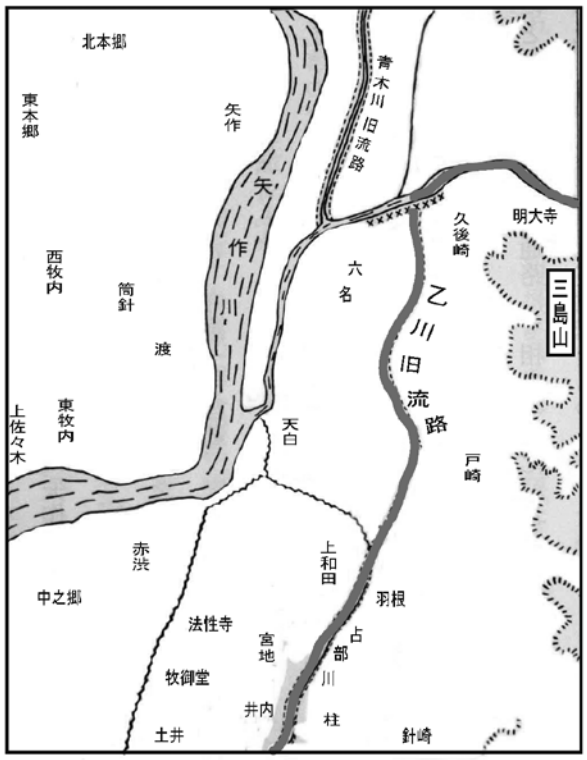
す。このお城、どの辺に出来たかといいますと、今の東岡崎の駐車場がございます。あの辺に屋敷城が出来たといわれております。現在の岡崎城のある竜頭山に砦城が出来たというのが1452年、55年、この頃でございます。岡崎という地名がこの明大寺から竜頭山、今の菅生のところに地名が移行していくんです。それから岡崎という地名が全体に広がっていっただろうといわれております。ここで浄瑠璃姫でございます。この資料15と16、それぞれ大学の先生方が、遠くの先生が書いておりますのでこれが5ページです。少し筋が通らないんですが、資料17の今申し上げた岡崎の地名うんぬんと書いてあるところ。西郷弾正左衛門が明大寺に屋敷城を築城した。そして竜頭山に移っていった。このことを頭に描いて資料をお読みいただけるとお判りになると思うんです。資料15でございますが、浄瑠璃姫は姿を変えて尾カ崎（岡崎）ヶ原に一庵を結び、長者の家に伝えられた姫の守り本尊薬師如来の尊像を安置していた。これが岡崎城本丸の持仏堂である。これは尾カ崎（岡崎）ヶ原、明大寺のことです。明大寺ヶ原のことです。一庵を結び出来たのは明大寺のお城でございますので、岡崎城本丸ではございません。逆に下の1455年岡崎城は西郷稠頼公により妙大寺ヶ原云々と書いてございますが、これはまた岡崎城が出来た、この明大寺のことでございますので、1455年ではなくて1420年か30年か、その頃のことでございます。この3つを合わせると正確な史実になると思うんですが、改めて申し上げれば浄瑠璃姫との関係は明大寺に出来たお城は浄瑠璃姫が身を投げた、その縁に建てられた庵、菅生川に身を投げた今の成就院の辺りでございますが、身を投げたところに草庵が建てられた。それが姫を偲んで乳母達が建てたお寺、後の成就院でございますが、それが現在の東岡崎の駐車場の辺り。そこに建てられた庵の上に屋敷城が建てられたというふうにご解釈いただければと思います。そして岡崎城、現在の岡崎城のお城の話でいえば、姫が亡くなる前、牛若が東に下っていった後、毎日毎日東海道の筋に立って牛若の、義経の帰りを待った。その時にひっそりと暮らしたのが現在の岡崎城のちょうど八千代食堂、その辺りに草庵が建てられた。隠れ住んでいたといわれるところがこの阪口教授のお話でございます。このことについてはまた後程お話させていただきます。

頼朝に戻りまして、頼朝は三河守となって三河武士団を自分のものにした。これが頼朝でございます。そして尊氏、尊氏は生涯2度の決断を矢作で行っております。八橋軍議と矢作川合戦。この矢作の決断その1と申しますのは、尊氏が鎌倉幕府離反の意志を表明した会議でございます。足利尊氏は鎌倉幕府の御家人筆頭でございます。その御家人筆頭がなぜ鎌倉幕府を裏切って後醍醐天皇についたかと申し上げますと、鎌倉時代頼朝三代が亡くなって執権北条氏の時代になります。年が経つにつれて鎌倉幕府そのものが公家化してまいりまして、武家の所領を安堵する、武家の土地、武士の土地をしっかり保障するということの約束がなかなか出来なくなってきた。つまり武士が自分の土地を持つことが許されなくなってきた。武家の棟梁としてこのままでは鎌倉幕府が潰れてしまう。だから後醍醐天皇に味方してもう一度武家の所領を後醍醐天皇からいただこうというのが八橋軍議でございます。なぜ八橋で行われたかと申し上げますと、先程申し上げました八橋には吉良、細川、一色、そして自らの軍団が三河武士団として矢作におります。この武士団を味方することによって鎌倉につくか後醍醐天皇につくか、これが八橋軍議でございます。尊氏のいう通り鎌倉幕府を見限って後醍醐天皇につく、これが決断その1でございます。矢作でなされました。後醍醐天皇に建武の中興、新政として時代は移っていくんですが、後醍醐天皇が決断したことは何かといいますと、自分が天下を取った。そしたらもう武士はいらない。武士の階級は認めない。政治は全て天皇が行う。これが後醍醐天皇の新政でございます。それでは尊氏は後醍醐天皇によって東国の武家の所領を安堵する、頼朝が行ったこと、後白河院に行ったことを後醍醐天皇に求めたわけでございますけれども、あなた達武士はもういりませんよといわれたのが後醍醐天皇ではなかったかと。そこで矢作川合戦でもって今度後醍醐天皇を討つということになったわけでございます。この時からあるいはその前の八橋軍議の時からでございますが、新田義貞と足利尊氏は敵味方になっていきます。なぜ敵味方になるかといいますと、鎌倉幕府を討ったのは、直接討ったのは足利尊氏ではなくて新田義貞なんです。新田義貞と足利尊氏は御家人でいうと同等のクラスですね。同等の家系です。新田義貞は鎌倉を討ったのは、鎌倉幕府を倒したのは自分である。武家の棟梁は私であると当然思っていた。ところが鎌倉の御家人が選んだのは足利尊氏だったんです。なぜかというと足利尊氏は三河で暮らしております。朝廷に近い所。その時足利尊氏は従五位下の官位を持っておりました。新田義貞は無位無官です。ということもあって御家人が選んだのが足利尊氏。これより足利尊氏と新田義貞は尊氏の反対となるところで働くようになってまいります。このように頼朝、尊氏が三河矢作、三河武士団と結びついて天下に駆け上がってまいります。

浄瑠璃姫のなぜ矢作かというお話でございますが、義経の姿の後ろに尊氏と頼朝がいたのではないか、これが私の推論です。なぜかと申しますと浄瑠璃姫が語られるようになったのが、先程申し上げました1470年頃といわれておりますが、この浄瑠璃姫が語られる時代、都では応仁の乱の時代でございます。応仁の乱の時代というのは、11年間京の都を焼き尽くした時代でございます。この時庶民は何を求めたか。強き政治のリーダー。この国を治めてくれるリーダーを求めた時代であったと思います。その頃この浄瑠璃姫のお話が都で一気に広がるんです。義経と浄瑠璃姫の悲恋の話ではございますが、その義経の向こう側に頼朝と尊氏の武将としての強きリーダーを求めたのではないだろうか。これが私の思うところでございます。なぜ矢作が舞台なのかということに対する応仁の乱。この時岡崎が先程申し上げた岡崎城創建の時代です。浄瑠璃姫のお話は岡崎で古くから伝わっていたと思います。岡崎城を創建する時代に今申し上げた庵の上に建てられた。浄瑠璃姫の庵の上に建てられた。浄瑠璃姫は伝承の人物でしょう。それなのに庵があるはずがない。でも西郷弾正左衛門が明大寺に屋敷城を建てようとした時に浄瑠璃姫の庵を守り本尊として建てられたという記録が残っているんです。つまり浄瑠璃姫に守られて岡崎城は建てられた。現在のお城、竜頭山のお城でございますが、これは兼高長者笹谷別邸の跡に建てられた岡崎城。先程申し上げた石田茂作博士が発表した『浄瑠璃姫の古蹟と傳説』この本の中に書いてあることなんです。空濠になっている岡崎の天守閣と伊賀川の挟まれたあの濠でございますが、この上に八千代が建っております。これを石田茂作博士は浄瑠璃曲輪といっております。この写真、能楽堂から八千代に上がっていく、あの坂道。これを浄瑠璃坂といっているんです。これは何かといいますと、笹谷というのは浄瑠璃姫物語の中では峯薬師の笹谷と出てきます。従来の解釈では峯薬師鳳来寺の笹谷で出てまいります。ところが石田博士はこれは岡崎城、現在の岡崎城のことであるという見解を発表しているのです。それがこの本なんです。この今の八千代食堂の辺り。あそこに建てられていたのが先程申し上げた浄瑠璃姫が隠れ住んで、毎日のように街道筋に出て義経の帰りを待ったといわれているのが現在の持仏堂曲輪といわれるところなんです。じゃあ博士は浄瑠璃曲輪という、現在の図面でいうと、本丸がございますよね。八千代の建っているところ、これ持仏堂曲輪となっているんです。これは恐らく岡崎城が初めに出来た頃はここを浄瑠璃曲輪といっていた図面があったんじゃないでしょうか。今私はその図面をまだ見つけ出しておりませんが、石田博士がこの本に堂々と写真付きで書かれて浄瑠璃曲輪とし、岡崎市はこれが浄瑠璃姫の集大成的な本であるといっているわけですから、多分その資料はあると思っています。もうひとつここの1号線の交番の横の所に、浄瑠璃姫の塔が建っておりますよね。これは博士がいうには浄瑠璃姫の塔ではなくて、乳母の冷泉の供養塔であると。これもはっきりこの本でいっているんです。冷泉の供養塔というのは何かといいますと、次の資料で出てくるんですが、乳母の冷泉の方は「笹谷の旧室を守り、姫の手馴れた調度、閻浮檀金の十二の手箱を売って伽藍を創設し、姫の守り本尊薬師如来の像を恭敬して一生を果てた。寺を浄瑠璃山光明院と号し、これが先程の1号線の所、その供養塔である。その供養塔の跡に乳母の冷泉が建てたお寺があった。」そしてそのお寺が、現在の浄瑠璃寺はセルビの横にありますが、移築されたと。その解釈が石田博士の解釈なんです。別のことでいえばここには川東の笹谷の別邸ということでも書いてございますが、こうした浄瑠璃姫と岡崎城建設にまつわるお話ということを、この本で私は初めて知りましたが、岡崎城にまつわるお話として他から聞いたことは一度もございません。現在の岡崎城、いろんな観光案内でされている、これも目にしておりますが、その方を非難するつもりは全くございませんが、笹谷が岡崎にあったとするならば、これは岡崎に大いに誇れるお話ではないでしょうか。その根拠はですね、鳳来寺の笹谷であるとするならば毎日毎日東海道に出てきて義経を迎えるということ、これは地理的に無理です。浄瑠璃姫が身を投げたその訳はといいますと、いつものように東海道筋に出た浄瑠璃姫が耳にした、旅人からの言葉「既に義経は都に上って姫を貰って過ごしている」と。これを聞いて姫は嘆き悲しんだ。身を投げるんですが、すぐその場で身を投げようとした。それを止めたのが冷泉なんです。まずは笹谷に戻りましょう。笹谷に戻るんです。ところが冷泉が朝起きてみると姫はいない。菅生川に身を投げている。ということでいえば菅生川の近くでなければ笹谷である理由がない。これは三河、矢作、岡崎を知らない方が作ったお話ならば峯薬師鳳来寺ということもあるかもわかりませんが、岡崎に住むものにとってみればやはり浄瑠璃姫が隠れ住んでいたところは菅生川の近くであったんではないでしょうか。その東海道はこの当時、今の東海道と違って菅生川の南にあったんです、この当時は。鎌倉の当時は。今の東海道は岡崎城下を通るようになったのはご承知の通り二十七曲りを造った田中吉政。その方が岡崎城下

に引き入れたんです。それまでは菅生川の南です。ですから今の岡崎城、その当時は何もない笹の山であっただろうと思います。そこに隠れ住んでいて、菅生川を、菅生橋を渡って東海道に出た。これが笹谷である。これも学会でお話して、それから何の返事もないんで困っておりますが、是非岡崎4大学の方がこのことを立証されて、ただ史実と伝承と織り交じったお話でございますので、この辺をどのように解釈するかという問題はあるかと思っておりますけれども、しかし岡崎城の出来た時に浄瑠璃姫の庵の上に建てられたとか、持仏堂曲輪があったとか、あたかも伝承の人物が岡崎の歴史と入り交じって出来てきた、出来上がった、これも事実でございますので、是非この辺は解明していただきたいなと思っております。

家康公にいよいよ登場いただきたいと思っております。家康公は峯薬師の申し子、これまた浄瑠璃姫と同じでございまして、大御方、於大の方です。「三州鳳来寺薬師寺へ男子出生のご念願有りて、通夜なされける夜の霊夢に、十二神の内、真達羅大将をお袖に入れさせたもうとご覧あり、其月よりご懐胎有りてご誕生のご男子家康公なり」これは峯薬師に、お薬師様に男子誕生を申し出た通夜なさる、これ一緒です。違うところは十二神将、お薬師様には十二の神様を祀っているんですが、寅の真達羅大将、これをまあ恐らく小さなお像だったんでしょうね。それをお袖に入れた。それで岡崎城に戻ってきた。家康公が生まれた時に、このお袖に入れた真達羅大将は鳳来寺にいつの間にか戻っていたというお話があるんです。これはただの伝承ではなくて、日光東照宮の縁起にも書かれているんです。いろいろ徳川家譜の文書にも載っているんです。甲山寺、甲山（かぶとやま）甲山寺というのは岡崎城の鬼門にあたるところでございまして、現在は2つのお寺しかございませんが、その当時岡崎城の鬼門、全山お寺であったといわれております。そこの定光坊周海という和尚が広忠の代わりに毎月鳳来寺に参詣したと。お礼まいりです。鳳来寺、実は住大夫師匠が「加藤さんなあ、一遍鳳来寺におまいりしたい」ということで、遠くからいうと鳳来寺はすぐ近くに見えるんですよね。なぜかといったら先程いった峯薬師の山ですから、岡崎にすぐ近い。しかし、実は、車で東名使って豊川まで行って、ぐっと行くと1時間半かかるんです、車で、高速通って。しかも鳳来寺山、石段は登らずに鳳来寺パークウェイで行って1時間半。これを歩いて行ったら大変ですよ。多分麓まで丸1日。朝1番に起きてあの階段を登ってお寺に行く。行って帰って3日。これを毎月和尚が行くんですから。まあ大



応永5年（1398）までに完成した乙川西流工事および南流せき止めのための六名堤の築造。
（岡崎市史第２巻第2章第２節　乙川開削事業と矢作宿）

変な、でもその為に家康公が生まれたと思えば行ったんでしょうね。この記録も残っているんです。それから東照大権現の本地仏はお薬師様。これは何かといいますと家康公は浄土宗大樹寺。一向一揆で家康公は危うく命を落としかけたこともある。でも浄土宗でございますから、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、ずっと書いてあって最後に南無阿弥家康というのが書いてあるのが大樹寺に残っている。ご承知だと思うんですが、これは阿弥陀さんです。念仏将軍といわれた家康公、ところが日光東照宮の東照大権現の奥院、本地仏はお薬師様なんです。阿弥陀さんじゃないんです。ということは家康公も浄瑠璃姫に守られてある。これは浄瑠璃姫から見た家康公の見方でございます。

いよいよ終盤でございますが、今までいろいろお話をさせていただきましたが、松平氏は源氏ではない。これ新行教授がいっている言葉なんですが、これはどういう意味かと申し上げますと、まず桶狭間の戦いで今川義元が織田信長の急襲を受けて亡くなります。この時、家康が18歳。命からがら大樹寺に逃れてきて、和尚とのお話ご承知だと思います。この時は松平元康です。竹千代から元服して松平元康、元康の「元」は今川義元の「元」をいただいての元康です。桶狭間で人質のように扱われてきた元康が、その御大将今川義元が亡くなった。「元」を取って家康になったんです。これは岡崎城が空っぽ

になって、今川勢が城代を固めていたのが義元が亡くなって今川勢は散っていった。空っぽになった岡崎城に入ったのが松平元康。そこで初めに行ったことが元康の「元」を取って松平家康になった。この家康という意味は色々な説があるんですが、八幡太郎義家の「家」を取ったであろうという説。でも18歳、元康の重石が取れて家康としたのは、やはり家を康らかにするという意味の方が私は自然だと思います。18歳で岡崎に入城し松平家康。そして徳川家康になるというこの名前ですが、よくいわれることが征夷大将軍になるには源氏姓でなくてはならない。だから徳川と名乗ったといわれておりますが、これは23歳の時なんですよね。この岡崎に入城して三河を平定するまで5年かかりました。5年かかって三河を平定し、松平家康が朝廷に三河守を申し出たんです。ところが朝廷、松平家、先祖の誰一人官位を貰ったことがない。官位を貰ったことのないものが三河守になることは相成らんと断られるんです。それで松平家康は何か知恵はないものかと。ここで相談したのが、間に立ったのが矢作誓願寺の和尚様です。誓願寺の和尚と時の関白、近衛前久。誓願寺の和尚と時の関白と繋がりがあるわけはないと私初め思ったんですけれども、今の誓願寺さんを思っちゃあいけないんですね、やっぱり、失礼ながら。誓願寺さんは兼高長者の菩提寺なんですよ。十王堂を建てたのが兼高長者。今でも残っております十王堂。兼高長者は先程申し上げたようにモデルとなった人物は三河に土着した藤原氏です。季兼、季範、範忠です。季綱については先程申し上げたように、鳥羽天皇に娘が仕え、白河院に仕え云々という、時の朝廷に一番近い筋を持っているのはこの三河藤原の家系なんです。だからその当時の誓願寺の和尚さん、最もその当時の誓願寺はもう少し後に出来たので、ちょっと違うんですけれども、誓願寺の和尚さんと近衛家、近衛家というのは藤原の筆頭格でございますので、やっぱり関係はあったんでしょうね。少なくとも家康よりも関白とは関係があった。誓願寺の和尚さんを通じて近衛関白に何とかならんものかといったところで出てきたのが、徳川四郎義季という家系なんです。これは新田系の家系になるんですが、もう一度系図を見ていただこうと思うんですが、ここに徳川家康の系図がちょっと出てくるんですが、源義家から始まって足利と新田が別れます。新田の系図でいうと新田義貞にくるんです。こちら義家から3代目、その子供に徳川四郎義季とここに徳川家康が持ってきたんです。これはなぜかといいますと、隣りの足利、この系図の中では三河に足利支流いっぱいいますので、足利本家を初めとして細川、仁木、今川、一色、吉良、いっぱいおりますので、足利の系統に持ってきたとするならばすぐばれちゃう。ばれちゃうといったら失礼ですけれどもすぐ判ってします。新田家というのは、上州から出たことのない一族ですので、ここなら判らんだろうなと。これも失礼ないい方ですが、やっぱり足利の系統の中には入れなかったんでしょうね。この徳川四郎義季という、この家系は絶えているんです。断絶しているんです。これを目につけたのは関白じゃないと私は思っております。これはどこの資料にも書いてないんですが、家康だと思うんです。なぜならば、家康からいうとお祖父さん、松平清康公。この方が安城から岡崎に入って、岡崎城に入って、その孫が家康になるんですが非常な実力者です。松平を中興し、家を興した方ですが、大樹寺の多宝塔に世良田次郎三郎清康という名が入っているんです。これは徳川と、その上州新田郡得河と上州新田郡世良田という村と一緒か隣同士かという関係なんです。やはり清康も源氏の姓を名乗るにあたって、世良田次郎三郎清康と名乗っております。大樹寺の多宝塔に書かれているということは、家康は知らないはずがないと思います。この家系、世良田次郎ではありませんけれども、徳川という家系を持ってきた。これを指し示して関白にこれにしていただきたいと申し出たんだろうと思っております。この辺は資料にもなかなか出てこないところなんですが、公家の吉田兼右、この公家に持ち込んで、近衛関白に話を通じた、吉田兼右が徳川四郎義季を見つけてきたという資料も説もあるんですが、私は家康がお祖父さんの清康公の名前を見てこうだったんではないかなと思っております。『先代旧事本紀』を偽の書とした徳川光圀。これにより三河物部氏の存在が脅かされた。その通りだと思っております。徳川の祖は新田郡の出とする三河物語。これは大久保彦左衛門が書いた本でございますが、新田義貞を討った尊氏は地に落とされた。「三河武士は足利の血で強くなった」と彦左は絶対に認めたくない。水戸学は南朝後醍醐天皇を正統の天皇とした。これにより尊氏は逆賊となった。そして太平洋戦争に向かっていく軍部、忠臣楠正成を崇めることで、尊氏をさらにおとしめ逆臣とした。これは一連の流れではありますが、私が感じるのは光圀公「徳川光圀の石田三成評」というのが、有名な言葉があるんですが「石田三成を憎んではいけない。主君の為に義を心に持って行動したのだ」と。これが現在、今行われております「天地人」「直江兼続状」というのが本当かどうかというのもこれもいろいろ説があるんですが、私はむしろいろんな見方があって然るべきだと思います。直江

姫が明治維新とともに消えた謎　　**浄瑠璃姫物語が都で語られて400年　そして姫が消えた**

明治維新では、すべてが西洋化へと進み、日本人が江戸時代につくりあげた「日本の心」と「日本人の誇り」は、省みられることもなく、戦後、その勢いはますます増したかのように思われます。三河岡崎にとっては、徳川家から薩長へと政権が替わることは、**反徳川の力**がさらに後押しし、永きにわたって時の政権と近くにあった**岡崎が、「一地方の街」**になるにつけ、浄瑠璃姫のお話が岡崎の人からいつしか知らないものになったんではないでしょうか。
江戸以降 三河は有数の**阿弥陀信仰**の場となったことも大きな要因でありましょう。

1　神仏分離令がもたらした**廃仏毀釈**　西洋化の波とともにお薬師様の姫が消えた。
2　**天皇を中心**とする明治の世評は、武家による政治、幕府による政治を否定した。
3　**徳川氏を絶対**とする明治後の三河は、それでも徳川はよしとし、尊氏を許さなかった。
4　源氏十二段は、浄瑠璃姫の話から源氏の話への転換であり、源氏とは義経を語りながらその奥に強き「源氏のもののふ」頼朝と尊氏の存在を仰ぐものとして語られている。**尊氏の権威の失墜**は、浄瑠璃姫が岡崎人の心から消えていく定めとなった。
5　**戦後のさらなる西洋化の波**は、**日本の心・日本人の誇り**をいつしか変えていった。

義公と彦左の心情そのものの岡崎人

光圀公と三河物語

水戸学が尊王を導き、時代の流れは攘夷、
　そして倒幕となった
三河は徳川のお膝元、
　会津と並んで明治政府からは疎まれた
明治新政府は、
　三河からの政治家・軍人を認めなかった
　700年続いた武士による政権 幕府、
　幕府そのものを否定した
新政府は、三河岡崎を見向きもしなかった
岡崎人は、それでも家康公をこよなく愛した
　　だからこそ家康公を愛した
岡崎人の家康公に寄せる思いは、
　　300余年太平の世を築いた家康公こそ
　　偉大であるとし、
　　尊氏を、そして頼朝の幕府を
　　認めようとしなかった

兼続のあの舞台の演出、脚色は明治以降の日本人が考えた、考え方であろうと思います。ここに「家康嫌いは光圀びいき」という言葉があるんですが、「秀吉の天下取りには義がある。信長亡き後未だ乱世、戦国の最中。しかし秀吉亡くなった没時は天下は収まり、五大老五奉行の合議の体制、それを我が物とする家康に義はなし。」これは片山杜秀慶応大学准教授がいっているんですが、あの物語、テレビを見てても「家康、もうちょっと優しいと思うよ」と皆さん思いますよね。あんなに憎たらしい奴というのは。でもこれは明治以降の説に、時代に沿えばこうなるんです。ところがね、私は「秀吉に義がある」とここに書いてありますけれども、この片山准教授がいっておりますが、秀吉は天下取った時に信長の孫、三法師の後継人として自分は天下を取ったんですよね。天下取ったならば三法師が成人したときに天下を渡すべきですよ。秀吉はどうしたかというと、美濃の一国、岐阜城を三法師、秀信に与えました。天下は決して与えておりません。義はないですよ。義があるとするならば秀吉はそこで下がらなきゃいけません。もうひとつ、秀吉が亡くなった時、天下は戦国に戻ったと思います。秀吉が生きていたからこそ天下太平っていうんですか、天下は守られていた。秀吉が亡くなった時に秀頼6歳でしたか、秀頼が守れるはずがない。この時天下は戦国に戻ったとするならば250万石、家康が動かないはずがない。また動かなかったならば天下は乱れる。これは家康に義がある。これは屁理屈じゃなくて、だと思うんです。この片山准教授の「家康嫌いは光圀びいき」。実は光圀は家康嫌いじゃあないんですよ。石田三成を憎んではいけないということから石田三成を擁護した。だから家康は駄目だとはいっていないんです。実は反対でして、光圀は家康が好きで好きでしょうがない。大好きなんですよ。家康こそは王道の実践者。尊皇抑覇とは鎌倉幕府や室町幕府であって、尊皇というのは天皇を尊重する。これは良いですよね。抑覇というのは覇王、覇王でございます。時間が過ぎております。結論を申し上げますと岡崎人というのは、光圀と大久保彦左衛門、そっくりだと思うんです。そのままだと思うんです。理屈でいうとここに書いたようにいろんな理屈が、姫が消えた謎いっぱいあるんですが、岡崎が好きで好きでしょうがない。違う。家康が好きで好きでしょうがない。家康は明治になって否定されました。光圀がいくらいったところで否定されました。それでも三河岡崎人は家康が好きで好きでしょうがない。その結果、私は姫は明治になってから消えたと思っております。最後時間がなくて、時間延長しましたこと恐縮でございます。12の話をこの時間で話すこと自体が難しいと思っておりましたが、ただどなたもお話してない江戸以前の鎌倉、室町、こんなに面白い話が岡崎を勇気づけるお話があるということをお判りいただければ、今日のまとめとさせていただきまして、終わらせていただきます。ありがとうございました。

さくらとひめに守られて

「このはなさくやひめ」をお連れした「みかど」。
物部氏の氏神を祀った村積山に「ひめ」をお連れし、
三河の「もののふ」に、平和の祈りを捧げることで
日本の平和を願った「みかど」。
「みかど」のさくらは今も岡崎を見守っています。

「浄瑠璃姫」は、義経との出会いと別れの悲しい恋物語。
また、それは武士の世界のはじまりを告げた時でもありました。
頼朝は、「天下のもののふ」として時代を切り開いていきます。

頼朝の時代は、また足利三河の時代のはじまりでした。
100年の足利三河時代の最後に、足利尊氏が三河を舞台に登場します。

浄瑠璃姫の庵室の上に本丸が建てられ、
ひめに守られて岡崎城は建てられました。
　　薬師の申し子　家康公
家康公の守り神・本地仏はお薬師様。

物部ー頼朝ー尊氏ー家康
もののふは、「さくらとひめに守られ」、平成の御世を迎えました。
「岡崎はもののふの文化のまち」であります。